

高橋良蔵さんをしのんで／農民運動の志を受け継ぐ

谷口吉光（秋田県立大学）

7月30日、秋田県を代表する農民運動家の1人だった高橋良蔵さんが亡くなった。88歳の天寿を全うされた生涯だった。

良蔵さんは羽後町の農家の長男として生まれ、小学校を卒業するとすぐに親と一緒に農業を始めた。戦争中、まだ十代だった良蔵さんは軍事訓練がいやで、それに対抗して仲間と「修農会」という会を作り、学校に行かずに活動に打ち込んだという。

権力に屈せず、正しいと思ったら仲間と一緒に運動を起こす。具体的な目標を掲げ、活動し、社会に訴える。柵檀は双葉より芳しという諺の通り、良蔵さんが天性の運動家・組織者だったことは、この若い頃の活動からも明らかだろう。

その後の良蔵さんのめざましい活動ぶりは「百姓宣言」（無明舎出版）に詳しい。出稼ぎに行った農民が賃金不払いや労災補償の不備に苦しんでいた状況を告発して闘った「出稼組合」の運動、減反せずに水田農業を守るために考え出した「水田酪農」の取り組み、岩手の農民と奥羽山脈を越えて交流した「奥羽山脈に風穴をあける会」の痛快な活動、全国から数百人の農家が東京大学に集まって語り合った「全国の百姓が黙ってられるか東京座談会」など、その構想力、行動力、指導力にはただ「すごい」というほかない。

秋田の県南にこんなすばらしい農民指導者がいたことを多くの人に知ってもらいたくて、このコラムを書いている。それだけでなく、できれば自分も良蔵さんの志を受け継ぎたいと思っている。

生前の良蔵さんとは米輸入自由化反対、地産地消や米粉利用などでおつきあいがあり、議論したり、一緒に調査させていただく機会もあった。いつも感銘を受けたのは、羽後町に住む農家という自分の立場を決して離れず、そこから工夫や提案を次々に生み出していたということだ。自分の住む土地にしっかり根を張り、そこから力と知恵を吸い上げて成長した大樹のような方だった。

農民運動や出稼ぎは過去の話になってしまった。だからといって、しかし、秋田は依然として貧しく、産業は中央資本に支配され、地域の衰弱は止まらない。華やかなショッピングモールやコンビニは一見豊かな暮らしをもたらすようできて、実際には秋田の富を県外に吸い上げる装置にほかならない。その証拠に地元の製造業や小売業は衰退する一方ではないか。

時代は変わっても、秋田に生きる私たちが搾取や蔑視にさらされているという現実是不変。その現実を直視して、なおその上でどうやって地域で自立して生きていくべきかを考える必要がある。

そうした覚悟を決めた時、農民運動家として戦い続けた良蔵さんの生涯は私たちの貴重な教科書になるのではないだろうか。

（朝日新聞「あきた時評」 2013年10月16日掲載分を加筆・修正した）